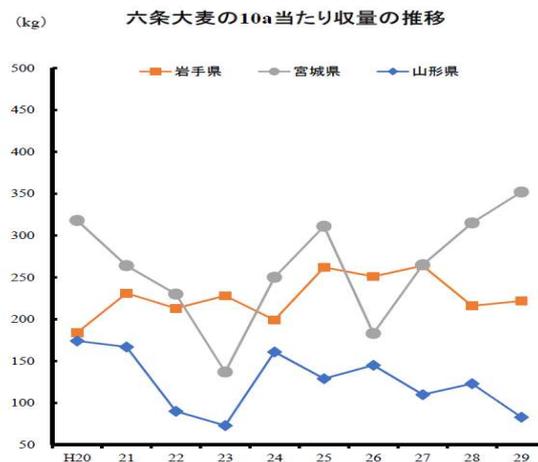
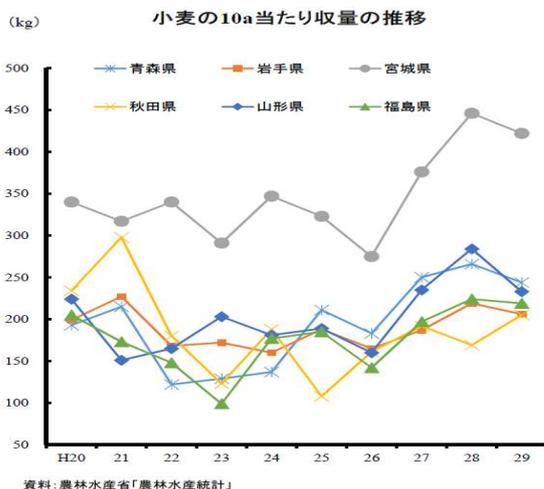


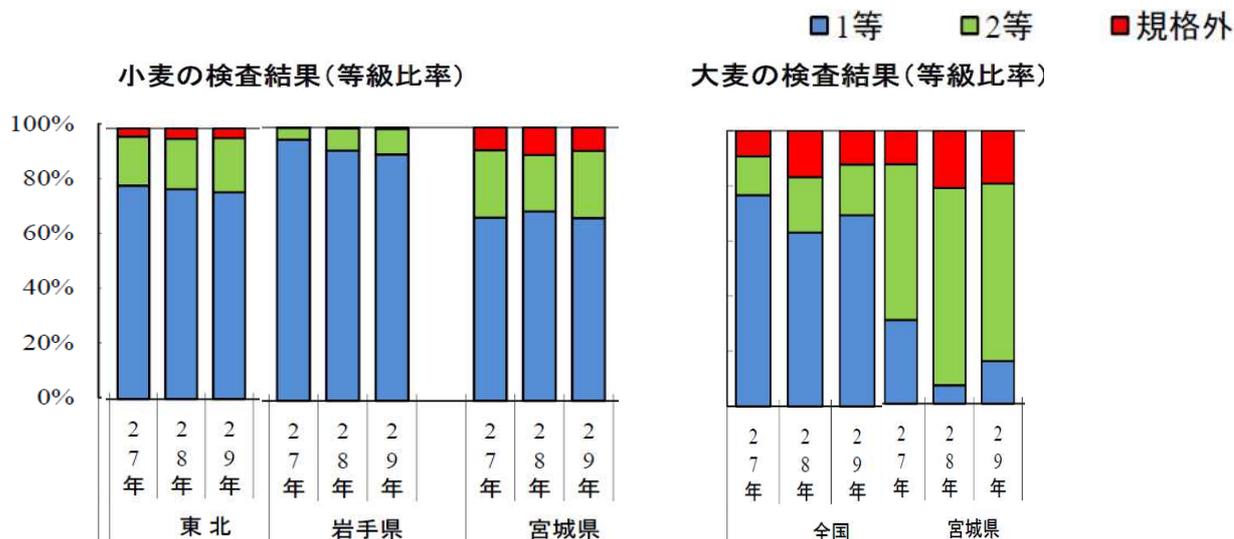
～H30年産総括と次年産栽培に向けて！！～

1 宮城県を中心とした麦の生産概況

(1) 東北地方からみた宮城県の収量・品質等

- ・宮城県の小麦作付面積は、岩手県に次いで多く、平成29年、30年産がそれぞれ1,200ha、1,055haとなっている。
- ・同様に大麦作付面積は平成29、30年産が、それぞれ1060ha、1160haとなっており、依然、宮城県が東北一で約90%を占める主産県である。
- ・宮城県の小麦等級は、ここ数年60%台で推移しており、岩手県に比べてやや低い。
- ・同様に大麦の等級は、例年20%未満となっており、全国の60～70%台に比べて低い。
- ・宮城県の収量は、小麦・大麦とも東北で最も多収で小麦が300～450kg/10a、大麦で250～350kg/10aである。





(2) 宮城県の平成30年産気象経過・生育(古試)と品質概況(検査協議会)

1) 12月15日の生育

- ・気温は、低く経過し、連続した降雨があり、12月中旬は雪が多く、10月と12月は少照、11月は多照と平均ではやや少照であった。
- ・本年から中旬・下旬播種の2時期を設定したが中旬区で出芽日数は、大麦で10日、小麦で11日と平年より長く、下旬区の出芽日数は大麦で13日、小麦で14日となった。
- ・一般圃場では、水稻の刈取時期が降雨で遅くなり、播種作業が遅れた。
- ・中旬区は、11月後半から低温で経過したため、生育量は平年より少なかった。
- ・下旬区は中旬区と比較して、草丈で約90%、莖数と葉数は約60%の生育量となった。
- ・中旬区の大麦の幼穂長は0.4~0.5mmと平年よりやや短く、小麦は0.2mmで概ね平年並で下旬区の大麦の幼穂長は0.2~0.3mm、小麦は0.1mmであった。

2) 2月10日の生育

- ・気温は、平年より低く経過し、降水量は、やや少なかった。日照時間は、概ね平年並で推移し、降雪量・積雪深は平年より多く、ほ場では積雪が続いた。
- ・場内の作況圃場は、積雪が連続したため、今作の2月期調査は欠測となった。
- ・中旬区の大麦(シュンライ)の幼穂長は0.76mm、小麦(シラネコムギ)は0.19mmで、いずれも幼穂形成始期に達していない。
- ・下旬区の大麦(シュンライ)の幼穂長は0.40mm(中旬区比53%)、小麦(シラネコムギ)0.15mm(同比78%)であった。

3) 3月20日の生育

- ・3月は高く経過し、降水量は、やや多く、2月の積雪は3月に雨となり融雪が進んだ。日照時間は、3月上旬を除き、概ね多照傾向で推移した。
- ・中旬区の草丈は、大麦・小麦ともに全品種で、平年の50%程度で、莖数も50%~70%であった。

- ・同様に葉数は、大麦・小麦ともに全ての品種で、平年よりやや少なかった。
- ・幼穂長は大麦で1.3～1.7mm、小麦で0.5mmと平年より短かった。

4) 4月10日の生育

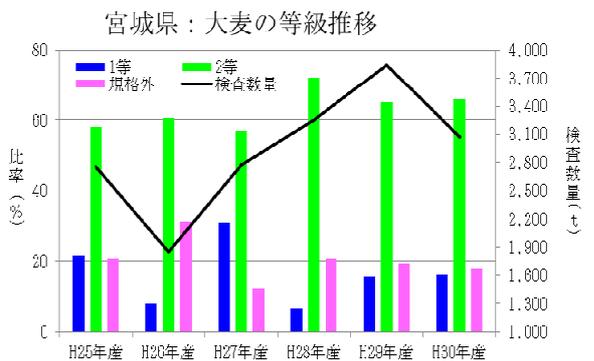
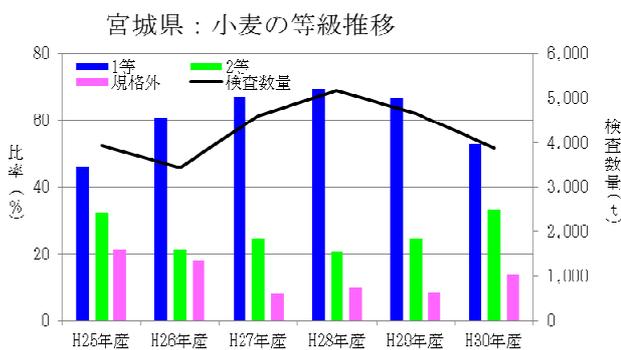
- ・気温は、高く経過し、降水量は、やや多く、日照時間は、3月が並～多、4月上旬は少照であった。積雪は、3月上旬の降雨とその後の高温と日照により消失した。
- ・中旬区の草丈、茎数は、大麦・小麦ともに、平年の7～9割程度で葉数は、概ね平年並となった。
- ・下旬区は大麦、小麦ともに、生育量は小さく、草丈・茎数・葉数ともに中旬区比8～9割程度の生育量であった。
- ・大麦の幼穂長は、平年より短く、幼穂形成始期に達した時期も平年より遅くかった。

5) 6月25日の生育

- ・茎立ち期は、4月中旬で平年より遅かったが、その後の好天により出穂開花期は早まった。
- ・成熟期については、大麦小麦ともシュンライ、ミノリムギとも中旬区で6月8、9日となり、小麦でシラネコムギ、ゆきちからで6月21、23日と平年より早まった。

6) 品質

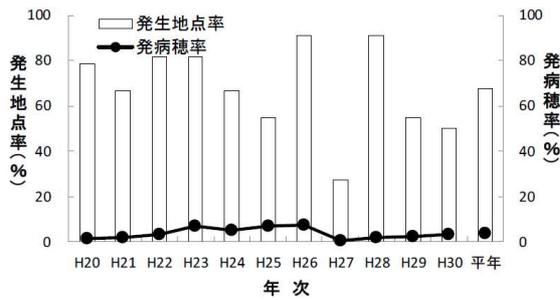
- ・小麦の一等比率は、53%と昨年産の最終を下回った。
- ・銘柄別では、「シラネコムギ」が一等比率63.1%と概ね良好で新品種の夏黄金は87.3%であった。
- ・大麦は、一等比率が16.0%、2等が66.1%と前年並みであった。



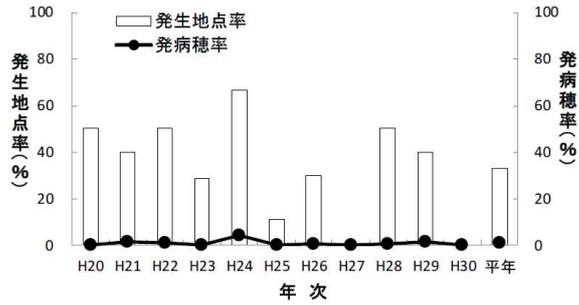
(3) 昨年の病害虫発生状況 (病害虫防除所)

1) 赤かび病

- ・小麦の発生地点率は50%で(平年69%)やや低く、発病穂率は3.2%で(3.7%)並だった。
- ・大麦の発生地点率及び発病穂率は0% (同地点率39.5%, 穂率1.1%)と低かった。



コムギ赤かび病の発生地点率及び発病穂率の年次推移



オオムギ赤かび病の発生地点率及び発病穂率の年次推移

2 平成30年10月の気象予報

- ・ 平年と同様に晴れの日が多い見込み。
- ・ 平均気温は、高い確率 50%
- ・ 1週目は、高い確率 70%
- ・ 2週目は、高い確率 50%

【10月20日～11月19日】

【1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)】

【気温】	20	30	50
【降水量】	30	40	30
【日照時間】	30	30	40

◆週別気温経過の各階級の確率(%)

1週目	10	20	70
2週目	20	30	50
3～4週目	30	40	30

■ 低,少 ■ 並 ■ 高,多

3 平成30年産麦の生産に向けて

- ◆ 麦は、播種後寒さに向かうため適期に播種し、年内の生育量確保が重要である。(北ほど早く)
- ◆ 天候は好天の予報であり、できるだけ早く計画的に播種作業を進める。
- ◆ 水田作麦のため、生育促進や生育量確保のため、暗渠・明渠・弾丸等の排水対策に万全を期す。

(1) 適期播種

- ・ 播種が遅れた H29 年産は茎数不足となった。そのため遅発分けつが多く品質低下を招いた。
- ・ 遅発分けつの発生が多いと、未熟粒や硬質粒が発生で品質が低下する。
- ・ 播種量は、大麦で 8～10kg/10a, 小麦で 9～11kg/10a を基本とする。
- ・ 赤かび病等の防除のため種子更新, 選種, 種子消毒を確実に実施する。

【播種期の基本】

北部平坦及び三陸沿岸地帯 晩限 10月20日
 南部平坦地帯 晩限 10月30日

4月

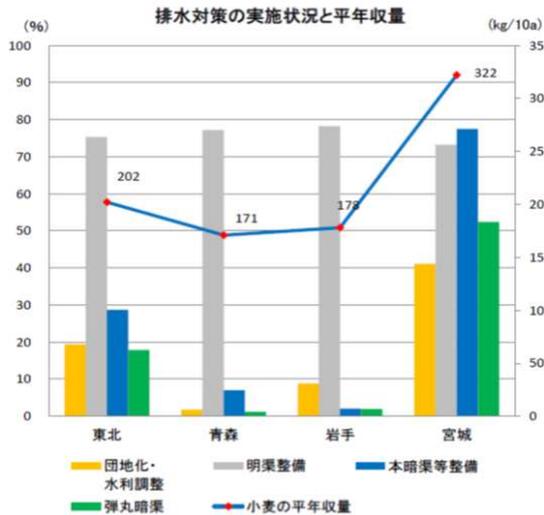


6月



(2) 排水対策

- ・宮城県が東北地方で単収が高いのは圃場整備や団地化排水対策の徹底が大きい。
- ・圃場内にも明渠（30～40cm 深）を設置し，本暗渠，弾丸暗渠を組合せる。
- ・排水不良田では，出芽後や冬季の寒害等で適正密度や十分な茎数が確保できない。



**明渠を周囲に設置し確実に排水路に繋ぐ。
(4月～6月まで崩れないように!!)**

(3) 品質向上技術

- ・適正な穂数や粒数を確保することで高品質生産につながる。
- ・適期播種や排水対策の徹底により適正生育量を確保して登熟を向上させる。
- ・タンパク質含有率のバラツキを抑制し，適正数値とするため適期・適量の追肥を行う。

タンパク含有量のバラツキをなくす技術 (例：S県における小麦(日本麺用)栽培)

